

「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。〔取って食べなさい。これはわたしの体である〕(マタイ 26:26)。

これは過越の晩餐の折にイエスがなされた作法で、後代の教会における聖餐式の論拠になっている。

直前、すでに「一同が食事をしているとき(26:21)」と説明されているのに、なぜここで同じ言葉がくり返されるのか(26:26)。同じ過越の夕食卓でありながら、前者では弟子の裏切りが語られ(26:21)、後者では自らの体と血を弟子全員に与えている(26:26～28)。

非常に心痛めた弟子たち(26:22)に与えられる体と血。己が罪を覚える弟子に、イエスは自らの裂かれた体と流される血を分け与える。

食卓を共にすることは親しい交わりの徴だが、イエスは弟子とだけ食卓を囲んだわけではない。差別されている徴税人や罪人はもちろん(9:10)、警戒するファリサイ派とも(ルカ 14:1)共に食事をした。

信仰の正邪、理解の深淺、親しさや敵意など、何の段差でもない。このイエスのこだわりのなさや伸びやかさに、世の党派心や教会の道徳などを厚塗りしたくない。ただ、裂かれる自らの体と流される血は通常の食卓の親しさとは違う。

「わたしを裏切ろうとしている(マタイ 26:21)」という言葉で、自分の事柄として心痛め(26:22)、罪に慄く者に分ち与えられる、試練を含む特別な恵みなのだ。

体は何によって裂かれるのか(26:26)。憎悪、利己心、怠惰、逆恨みなど、罪によってズタズタにされる。この事実を、君たちの罪を「取って食べなさい(26:26)」と。

「血」はどうか。「罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血(26:28)」。「多くの人」とはイエスの母語アラム語の用法によれば、「すべての人」であろう。

血の真実を「彼ら(弟子)に渡して言われた。〔皆、この杯から飲みなさい〕(26:27)」。愛と赦しの恵みは、罪人である弟子によって「すべての人」に宣べ伝えられる。

「わたしの血、契約の血である(26:28)」。「契約の血」とは何であろうか。契約なら聞きおくだけでいいではないか。契約とは証文を取り交わし、相互に確認し合うものではないのか。

違う。この契約は一方的に与えられるもので、キリストが身を裂いて「すべての人のために」言い表した約束なのだ。

「来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す(エレミヤ 31:33)」。

この契約は、聞いて理解するだけでは間に合わない。頭の記憶ではなく、はらわたに据えられる約束なのだ。杯によって我が身にくっきり刻印されなければならぬ。

主の御手によってこの胸に授けられ、キリストの苦しみがこの心に記されることで、ようやく「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる(31:33)」。

キリストはすべての人と食卓を共にされる。それほど親しく、共に生きようとされ、今もなお傍らで共に泣き笑いしておられる。

一歩進み出、聖餐の食卓に与る者は、辛くとも己が罪を自ら問うこととなる。

どんな罪をも清める十字架の赦しと、圧倒的な愛をこの身に感じ、主の律法(恵み)は我が胸に授けられ、我が心に記される(31:33)。ゆえに私たちは「すべての人に(マタイ 26:28)」十字架を伝える。



《おまけのひとこと》

光の照度を上げて分るまい 眩いだけで 光は蠟燭一本でいい 自らの暗がりには置けばいい
すると さらに暗い場所があるじゃないか そこでは蠟燭のなんとという明るさか 闇こそ恵みの場